

令和6年度 第2回総合教育会議 会議録

開催日時	令和6年8月29日 木曜日 13時30分から15時10分まで
開催場所	二宮町町民センター3Bクラブ室
出席者	村田邦子町長、和田智司教育長、藤原直彦教育長職務代理 岡野敏彦教育委員、杉本かおり教育委員、古正栄司教育委員
町部局	政策部長
教育委員会	教育部長、教育総務課長、教育指導課長、生涯学習課長、 教育指導課課長代理、教育総務課教育総務班長、教育総務課学校施設班長、 須賀副主幹、秋本学校栄養職員、伊藤学校栄養職員
その他	傍聴 1名

※会議次第および資料は、別添ファイルのとおり

会議記録

1. 開会（司会：教育部長）

2. 町長挨拶

第2回の総合教育会議となりますのでよろしくお願いします。現在、次年度の予算編成が始まっており、今後、担当部局とのヒアリングを始め、地域や団体からの要望なども踏まえ総合的に検討していくこととなります。町では、子ども家庭庁の子ども大綱を受けて、現在、従来の「二宮町子ども・子育て支援事業計画」の内容を包含した形で「二宮町こども計画」を策定しています。若年層から青年層の子どもを対象とした計画で、子どもの貧困、子ども居場所づくり、子どもの意見の活用を始め、新たな方針を踏まえ町の施策を検討しています。取組の推進には、子育て部門だけでなく、教育部門などの各課との連携が必要不可欠となります。次年度施策・予算においては、「子ども真ん中」をキーワードに、幼少期から学齢期、そしてその後まで一人ひとりの子どもが町で健やかに育っていけるように、重点的な施策を打ち出していきたいと考えていますので、色々ご意見をお伺いしたいと思います。本日は、それらの取組に関連する給食と放課後子ども教室について議論をしていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

3. 協議・調整事項

(1) 学校給食における地産地消と食育について

教育総務課長より資料説明

○地場産物を活用するための基本方針を定めた「学校給食における地場産物等を活用した食育推進計画」に基づき令和6年度の具体的な取組を行っている。（以下、基本方針）

- ① （市場の規格、値段等と同程度の）二宮産食材を積極的に使用する。従来発注していた野菜（たまねぎ、さつまいも、菜の花）は引き続き使用する。
- ② アレルギーに配慮した無添加食品を推進する。
- ③ 二宮産の地場産物を使用した「地場産デー」を実施する。
- ④ 神奈川県 の地場産物を使用した「地場産デー」を実施する。
- ⑤ 地場産デーに併せ、栄養士による食育を実施する。

○地場産デー用の献立内容や食材の提供者を紹介したチラシにより子どもたちに周知。

○献立表及び給食だよりにより保護者に周知。

主な意見交換

町 長：教育委員の皆さまには、6月の地場産デーで「二宮産夏野菜カレー」を試食していただきました。私は地場産デーで何度か学校で子ども達と一緒に給食を食べた時に、栄養士さんが教室のスクリーンを活用して、子どもたちに使用食材や農家さんについて紹介している様子を見せてもらいました。食育という形がしっかりできているなという印象を受けました。皆さんの印象はいかがでしょう。

岡野委員：色々苦労もあるとは思いますが取り組んでいただきありがとうございます。食育もさることながら、二宮で生産されているものが子どもたちの印象に残り、大人になった時に給食でこんな二宮の食材を食べたなとふと思い出すように、現在だけでなく将来にまで意識がつながるように子ども達にしっかりと定着していくといいなと思います。取り組むにあたっては品質の確保と安定供給がポイントになると思いますが、どのあたりが一番苦労するのでしょうか。

教育総務課長：給食を提供する側としては、当日にしっかりと数が確保できることが重要になります。

また、品物を機械に通す工程では、形が揃っていないと作業に狂いが生じるため、大きさが揃っていることも重要です。同時に品質についても確認をしています。地場産を提供いただく団体に、そのあたりを調整するのが苦労しているところです。

岡野委員：これまでに供給できないなどの支障をきたす場面はあったのでしょうか。

教育総務課長：農家の方は数量が確保できない場合には、他から調達できるような手法も考えているので、今のところ大きな支障は生じていません。

岡野委員：近年は環境の変化が激しいので、予定していても確保できないことも予想されるので、そういった時のバックアップ体制があった方がいいのかなと思います。

秋本栄養士：夏野菜カレーでは、じゃがいも、ズッキーニ、ナスを提供する予定でしたが、天候の影響で直前になりナスの収穫量が減ってしまいました。その時には他からの調達で補ったため価格をオーバーセザるを得ませんでした。自然の面を考えると、供給量の確保については苦勞する場面があるのかなと思います。また、前年度は7月に夏野菜カレーを提供しましたが、その時はズッキーニが収穫できませんでした。そのため今年度は6月に時期を早めたのですが、今度はナスの収穫のタイミングが合わないなどの課題がありました。今後はそういったタイミングも相談しながら進めていきたいと思っています。

岡野委員：随時対応する必要があるので、そういった面で非常に苦勞されたのかなと思いました。

町長：夏野菜カレーで食材を供給したのは、有機野菜にこだわりをもった農家さんで、農業しながら数量のコーディネートまでするのが正直大変との声を聴いています。今後は栄養士さんだけでなく、産業振興課にも話を聞きながら進めていく必要があると思います。有機野菜にこだわると、収穫の季節や大きさなどの課題があるので、調達までの過程が少し大変なようです。

藤原委員：とても良い取組だと思います。今後はどう継続していくかを考えていく時期に来ていると思います。基本方針の手前にはなぜやるのかという目的があり、その目的の一つには二宮のブランディングという役割があると思います。二宮では野菜がしっかり採れ、それを食べる子どもたちが町のファンになり、いずれ町に戻ってきてくれる。また、移住を考えている人たちに、町では地場産を活用した給食を提供していることをアピールすることで、良い町だと印象づけることもできます。その点を踏まえると、ここまでの取組を縮小するのではなく、維持もしくは拡大することを考えていくべきです。手探りで始めたことをこれから少しずつしっかりと形作り、そこには一定の予算を確保する必要があると思います。なぜ食育が必要なのかと考えると、取組が非常に分かりやすいのだと思います。食べて体感して、それをみんなで共有できますし、天候によって不作につながるなどの環境問題も触れられます。以前紹介したアリスウォーターさんの映画では、学校の中で野菜を作る取組が紹介されていました。子どもが減少していく中で、当面、町は5校を維持してくるのであれば、空いているスペースを活用し地産地消と上手く結びつけることが考えられます。さらには生物、化学などの関連するカリキュラムでも取組を浸透させ、給食の枠だけでなく全体的に食育を捉えていけるといいのかなと思います。

町長：地産地消は、調達するために必要なガソリンをなるべく使わないので、環境面から考え

ると非常に良いです。栄養価や健康面だけでなく、そういった総合的な観点から地産地消を考えられるようにストーリーを作って、子ども達には説明してほしいと思います。現在、学校では野菜などを育てているのでしょうか。

教育部長：バケツ稲などは農協と協力して進めています。

古正委員：小学校の1、2年生の生活科ではミニトマトなどの栽培を行っています。

町長：無農薬と地産地消の2つの観点で今後も進めていくことになりましたが、地産地消については二宮産にこだわらず地域を少し拡大するとアレンジが広がっていくと思います。「二宮やさしいごはんの会」の方と話し合い、給食でしいたけなどの無農薬野菜の提供が始まりましたが、今後、取り扱えるものが調整できれば、内容がさらに充実していくと思います。今年はこの後に人参の提供が予定されているようです。一步一步できることから進めていくことになりました。

古正委員：この食育の取組を推進するためには、コーディネートする役割を担う人が必要不可欠だと思います。コーディネーターは行政や学校、農家をつなぎ、場合によっては市場や仲買人までも上手につなぎ、食材の調達をしていく。そういった観点で「人」が必要だと思います。また、先ほどのお話を聞いていて、規格外品を積極的に取り入れていくことも必要だと感じました。規格外品も上手く活用してくれば、生産者にとって食材が供給しやすくなると思います。規格外品を取り扱うのは難しいのでしょうか。

秋本栄養士：限られた調理時間であるため、規格が揃っていると調理しやすく、効率が非常に良いです。また、例えばジャガイモで規格が不揃いのものを一緒に皮をむく機械に通すと、小さいものは皮を削りすぎて、サイズが小さくなるだけでなく、栄養価にも影響が出てきます。しっかりと量と栄養のバランスを計算して調理しているので、そういった面で規格を揃える必要があると考えています。

古正委員：特定の日に食材を使用しようとするのが難しいですが、普段使いの中で、規格品と規格外を使い分けるなどして活用できると良いと思います。方針の中では、同等または安価なものを積極的に使用するとされていますが、少し価格を上乗して卸せると生産量を増やせるという農家の方もいるだろうなと思います。規格外も含め活用が広がると、食材の確保や食品ロスを減らすことにもつながるため、何とか工夫できると良いなと思います。現在普段使いでも使用しているのでしょうか。

秋本栄養士：今後使用する人参は、ミートソースやコンソメスープなどほぼ毎日使われる食材です。

新メニューの中で活用するというより、現在のメニューに取り入れていく予定です。

古正委員：そういった普段使いで使用する食材についても、子ども達にチラシを作ってお知らせするというのでしょうか。

秋本栄養士：そのとおりです。

教育総務課長：先ほど価格の話がありました、食材を町に直接納めることができれば、燃料や人件費、手間などが省くことができるため、仮に同等の金額で卸しても、卸すためのコストを節約できるというメリットもあります。

杉本委員：栄養士さんのお話はどのような形でやっているのでしょうか。

教育総務課長：例えば昨年小学校で実施したのですが、3回行った地場産デーの1日目を二宮小学校、2日目を一色小学校、3日目を山西小学校というように順番に回りました。

杉本委員：他の2校は給食の放送はせず、チラシの配布のみということでしょうか。

教育総務課長：そのとおりです。

秋本栄養士：チラシや一口メモにより子ども達にはお知らせをしています。

杉本委員：放送を5校に一齐に流すことは難しいのでしょうか。

教育総務課長：各校の給食時間が違うため一齐に実施することは難しいです。

杉本委員：せっかく実施していても気づかない子どもがいてと保護者から聴きました。おそらくチラシを配布するだけではさっと情報が流れてしまうので、先生の方から声に出して簡単に紹介してもらうなどの工夫ができると良いと思いました。食べながら聞けたらより実感が湧くと思います。素晴らしい取組なのでぜひ検討をお願いします。

教 育 長：私自身も生産者なので、やはり規格内の作物を作るはなかなか大変だと思います。規格外でも工夫して活用できると良いなと感じました。

町 長：2、3学期に実施する際には、栄養士さんの放送がない学校でもぜひ紹介できる工夫をお願いします。

古正委員：安全・安心な給食の提供を優先するとなると、今の人材の中ではなかなかこの取組を推進するまでには至りません。この取組を本気で進めるために、専門の人材の配置をぜひご検討をお願いします。

町 長：有機野菜を提供できる農家はまだ限られていますが、少しずつ取り組んでいくしかないと思います。町内の農家は高齢化しており、また後継者も不足しています。一方で、毎年わずかではありますが、移住者や若い世代の中で新規就農者もあり、農協にも所属しているようです。これまでは有機野菜の農家は農協などには所属せず、自らで販路を開拓している状況でした。新規就農者や農協も昔と考え方が変わり、互いに関わるようになってきているので、そういった形での見通しが少し見え始めているのかなと感じます。先ほどのコーディネートの特も含めてですが、こういった状況も見ながら進める必要があると思います。1、2月の人参については、先ほど話があったようにしっかり周知を行っていただきたいと思います。

岡野委員：苦労が色々あるとは思いますがぜひ継続していただきたいと思います。

町 長：それぞれの思いや現実の問題との差もありますが、一步一步前に進めていきたいと思
います。

(2) 放課後子ども教室の現状と今後の課題について

生涯学習課長より資料説明

○開催趣旨：放課後に子どもが安心して遊んだり学んだりできる場を提供し、子どもの健全育成の一助とする。また、地域住民や青少年が場づくりに参画することにより、地域で子どもを育てるという気運を高める。

○現状

- ・各学校の参加人数及び登録率は増加傾向にある。学校によっては、奇数学年と偶数学年の開催に分けている。
- ・サポーター登録は、地域学校協働活動推進員のつながりで多くの方に協力いただいている。
- ・気候変動により猛暑が続いており、夏場の開催は厳しくなっている。

○課題

近年、参加児童が増加傾向にある中で、夏の猛暑の中での実施場所の検討や、地域の大人（サポーター）の継続した支援が必要であるが、持続可能な事業とするためにどうすべきか検討する必要がある。子ども目線からするとふらっと立ち寄れる居場所、保護者目線からすると子どもの安全性が確保されていることがキーワードとなる。

※参考（地域学校協働活動推進員、サポーターの声）

- ・参加者が多い学校では奇数学年と偶数学年に開催を分けているため、1人あたりの参加できる回数が学校によって違うので不公平感がある。
- ・毎月1回の定例的な行事になった方が、気軽に立ち寄れる居場所になる。（現在は、7～9月が猛暑で開催できないため、秋以降の開催が中心になっている。）
- ・サポーターは、地域学校協働活動推進員などの繋がりで見守り確保している。サポーターの中には、自分自身の子どもが小中学校に在学しているときは関われるが、卒業したら参加しないとの意向がある方もいる。

主な意見交換

藤原委員：プログラミング教室には、講師側として中学生に参加してもらっているのですが、本当に素晴らしい活躍をしてくれています。大人でも色々考えて小学生に伝えているのですが、中学生は伝えたいことを自分自身の言葉に変えることができ、しっかり小学生に伝えられていて素晴らしいかったです。こういった機会を作ることが重要で、役割を任されるとしっかり責任をもって取り組んでくれることにつながります。先ほど参加者が6年生になるにつれ減少しているとの話がありましたが、どこかのタイミングで参加する側から教える側に少しずつチェンジしていけるといいなと思います。例えば、プログラミング教室では、まず5年生で体験して、6年生で少しサポートする側になり、中学生になったら講師になるというような流れです。小中一貫でもありますが、ロールモデルが見えるというのが、放課後子ども教室にもあるといいなと思います。全体の方向性として、事務的な手間は減らせるように少しずつ試しながら改善できたらよいと思います。また、放課後子ども教室をどこまで広げていくのかという目指すべき姿を、3年程度の計画を立て予算などとも連携させて考えられると良いなと思います。

町長：山小のサポーターの人数を見ると少ないと感じるのですが、状況はいかがでしょうか。

生涯学習課長：個人の登録は少ないですが、団体として参加いただいている方が多いです。

岡野委員：以前、点検評価で放課後子ども教室の参加人数の合計がおよそ2,000人だということを聞いて、すごい規模感を感じました。放課後子ども教室に関わる子どもの参加率なども考えると、今後も継続していくべき取組だと思います。運営については、先ほど話にあったように、子どもたちの中で参加する側から教える側に役割がシフトしていく仕組みになるといいなと思います。別の取組にはなりますが、ガラスのうさぎについても、中学生が戦争について考えたことをディスカッションする姿を小学生に見せて、数年後に自分たちも同じ立場になるのだという意識を持たせるのが大切だと思います。同じ視点で、放課後子ども教室も自分たちが楽しむだけでなく、少し先の姿を見せられる取組につながると良いなと思います。

杉本委員：色々なイベントで参加者が減少している中、放課後子ども教室の参加人数が増えているのは喜ばしいなと思います。二宮小学校では夏休みの開催回数を増やしたのですが、参加人数が多く、ニーズがあるのかなと思いました。猛暑や保護者の仕事の関係で、夏休みに遊びに行けていない子どもがいるという話が耳に入ってきていて、子どもや保護者の方にとって、この取組は非常に良いのかなと感じています。そういった夏休みのニーズがある一方、放課後での開催が少ないのも課題だと思います。夏休みも放課後もバランスよく開催でき、月1回くらいになるのかなと思います。回数の問題もあるのですが、1回ごとに生涯学習課の職員を始め、かなりの方が関わる大きいイベントなので、もう少しサポーターだけでも運用できるようなライトな回

を設けるなどの工夫ができるといいなと思います。夏休み開催だと中学生が参加できるのも良いなと感じました。

町 長：小学生だと地域の人との関わりがありますが、中学生だと部活動などもあり地域との関わりが少なくなるようです。比較的に夏だと中学生も動きやすいでしょうから、夏休みに何かしらで中学生が参加できるようになるといいと思います。夏の活動では暑さの問題があるので、外が無理なのであれば教室などを活用していけるといいと思います。サポーターも高齢化していくので、中学生にも関わってもらうのも有効な手法だと思います。異年齢の関わりも生まれて良いのではないのでしょうか。

岡野委員：以前、二宮中学校の PTA の中で、災害時の中学生の役割を議論したことがあります。避難所の中学生の役割として、地域の大人の力としてサポートするのか、もしくは小さい子の見守りを行うのか、そういったことを担ってもらうのはどうかという意見がでました。中学生を放課後子ども教室のサポーターにという話は、いずれ防災の面での役割にもつながっていくのかなと感じました。そういったことを踏まえると、行政として経済的に下支えして支援していく必要があると思います。

藤原委員：学校運営協議会との位置づけはどのようになっているのでしょうか。

教育指導課長：学校運営協議会のメンバーの中に、地域学校協働活動推進員が所属し、推進員が主体で放課後子ども教室をコーディネートしています。放課後子ども教室は、学校運営協議会が主体ではありませんが、学校運営協議会のメンバーの中には協力していただいている方がいる状況です。

藤原委員：中学校の学校運営協議会としてはあまり関わりないということでしょうか。

教育指導課長：そのとおりです。

藤原委員：そうすると中学校側は、中学生を生かせる場として放課後子ども教室を認識していないということになります。二宮中学校では現在イベントに出店するなどの話が出ていますが、学校運営協議会として中学生を生かせる場を認識できればもう少し動きが出てくるのかもしれませんが。また、学校運営協議会の取組の停滞感も課題となっているので、何か新しい取組をするのではなく、こういった既存の取組を取り入れると活性化につながるのかなと思います。

町 長：吹奏楽部が楽器を教えるなど、中学生が教えられることを提供できたら良いと思います。

古正委員：中学校にボランティア部などを作っても面白いかもしれません。

町 長：青少年活動が以前よりだいぶ減っており、中学生が地域などに関わる場も減っています。今回のようなことを切り口にすることは良い機会だと思います。

藤原委員：役割があると活動がしやすくなると思います。また、これは小中一貫ともつながること

にもなります。

教 育 長：プログラミング教室を見学しましたが、やはり中学生は生き生きと活動していました。

こういった取組は小中一貫、小中交流にもつながる良い機会だと思います。また、参加団体の大人の方との交流で小学生も刺激を受け、様々な興味をもつきっかけになり、生涯学習活動としても重要な取組だと感じます。

町 長：予算については国・県の補助も生かしつつ、維持していきたいと思います。暑さについての課題等もありますが、色々工夫しながら進めていきたいと思います。

（３）その他

岡野委員：教育委員を８年経験した中で、教育の将来研究の機能をもう少し増やしていった方がいいと感じています。現在、学校教育などは様々な課題が山積しており、その部分については、人材をしっかりと配置するとともに、予算なども確保し取り組んでいくべきだと思います。一方で、将来研究の部分についても取り組む必要があると思います。教育に関わらず様々なことが過渡期だと思いますが、特に ICT については、変化とスピードが速いので、それらの動きを的確に捉えて模索していく必要があると思います。現在学校で使用しているタブレットなどが、３年後には世界の動向を踏まえてどう活用していくのかなど、先読みすることが必要だと感じています。例えば、雑音を消し必要な声のみ通すというようなデジタル耳栓が出てきているようですが、そういった新たな技術を検知し、今後の教育行政にどのように生かせるのかを短期的もしくは長期的な視点で研究する必要があると思います。そのように観察、予測をしていくためには、やはり定点観測や新規領域観測をしていく必要があります。どのようなところを観察していくかということ、世の中の需要などの社会動向、どのような人材が求められているかなどの産業界の動向、日本と比較しての海外の動向などで、そういった部分をしっかりと見据えていくことが重要です。デジタル教科書では、どの画面を見たかのログをとり、一人一人に合った素材を提供するようなことも技術的に可能になってきているので、実際にその技術を活用する時にどのように授業を行うのかなど、将来的な研究が必要だと思います。世の中で当たり前になってから取り入れるだけでなく、先取りして、人材の準備や財政的な計画を立てられるようなロードマップが必要かなと思います。子どもたちが検索、閲覧しているページなどから心を分析し、日々の児童生徒指導に活用することも、デジタル技術では可能になるので、ICT の使い方について研究することなども考えられます。個人の特定はできなくても、ある小学校の高学年で「いじめ」「いならい」「いやだ」のような NG ワードを検索したログを察知するだけでも、初動のスピードを上げることができます。短期的に実現するものではないですが、将来的な体制づくりとして今からスタートし

てもいいと思います。経済産業省の未来人材ビジョンでは、今後こういった人材が求められるのがまとめられており、その答申を受けた文部科学省はそれを学習指導要領に組み込んでいます。それらを見ると将来的に必要な人材や今後の動向が見えてくるので、それらも定点観測していくのも一つだと思います。

町 長：小中一貫の研究会など、これまで町として必要な研究を専門家も交えながら行ってきました。ただ、今のお話を聞いていると、町単独で行うものではなく、国や県が示した研究結果を踏まえて市町でどう取り入れていくのかというような、大きな規模感のことだと思います。町単独で研究するよりも、近隣市町と一緒に広い面での研究体制ができるといいなと思います。

岡野委員：現在の教育委員会の課題を聞いていると、日々の業務や突発的な対応に追われている現実問題がありますが、一方でこうした将来研究も重要で、決して片手間で進められるものではないので体制を手厚くして少しずつでも進めていくことが大事です。

町 長：観光の分野では、県と各市町で協議会を組んだりするのですが、こういった大きな課題については県が中心に研究していくのが現実的だと思います。

岡野委員：様々な研究資料や情報が公開されています。教育工学会の研究論文のタイトルだけでも、目を通しキーワードを拾うだけでも良い情報収集になると思いますし、良いアイデアにもつながります。

町 長：新しい技術が何のためにあるのか捉えられると、今ある技術に上手く取り入れられヒントになると思います。

古正委員：岡野委員と同意見で、調査研究を専門的にできる部署があるといいと思います。他の大きい自治体では、例えば教育研究所とは別に未来教育戦略室を設けているところがあります。町では少し小さい規模でもそういった部署を設け、それらの研究結果を、小さな町だからできる魅力ある学校づくりなどの町の施策に生かしていくことが非常に大事なことだと思います。将来的な視点でご検討をお願いします。

藤原委員：将来的なことを研究することは大事なことである一方で、今ある足元を整備することも重要です。教育委員会点検評価でも具体的な取組について振り返りを行いましたが、現在の体制の中で、取組を進めていくことについての課題があれば教えてください。

教育部長：今年度から教育指導課が独立し、不登校対策、いじめ対策、多様化する児童生徒の対応などの様々な課題に対応する体制が整備されました。現在の人材で何とか対応している状況ですが、今後発生する新たな課題等を踏まえると、さらなる体制の強化が必要だと感じています。

藤原委員：二宮町の魅力を作るには「教育」は非常に大事だと思います。その期待に応えることも教育委員会としての役割だと感じています。町として、必要な施策が様々あり、限られたリソー

スの中で優先順位をつける必要があるとは思いますが、やはり「教育」が1丁目1番地に位置づけられると良いなと思います。やはりそういった部分を町民も見ていると思いますし、新しい課ができ体制が整備され、予算がつけられ、上手く取組が行われているとアピールできることにもつながるので、ぜひそうなっていただけると良いのかなと思います。

町長：現在行っている取組が、町の魅力につながっていると思います。将来の投資は大事だと思う一方で、理解を求めていくには具体的な説明が求められます。首長発信で進めることというより、様々な人との議論を深めて理解を得ながら進めることが重要であると思います。

岡野委員：小中一貫の推進する中で、4-3-2制にする意味や理由をしっかりと理解されていないと、議論が進んでいかないと思います。

町長：小中一貫とは何かというところから、これまで数年をかけて何度もじっくりと議論を重ねてきて、ようやく下地ができてきたのかなと感じています。将来に向けての研究についても、色々と議論を重ねながら必要性のあるものを見極めていくのかなと思います。

岡野委員：電子黒板などの将来的なキーワードには、必ず潮流があると思います。これらを捉え、町としてこれから進めることのバックグラウンドをしっかりと整備していくことが必要です。すぐにできることではありませんが、将来的な視点にたって組織として研究機能を持たせることが必要だと思います。

町長：町として研究機能を持たせることは将来的になるかもしれませんが、議論はすぐにでも始められることだと思いました。

4. 閉会